

高齢化社会を迎える日本、認知症対策は急務と言えます。かつて認知症は一度患ってしまったら 何の手立てもない「絶望の病」と恐れられてきました。しかし今、医療そして介護によって適切なケアがなされれば、認知症になってもずっと残された力を維持できる、自分らしい暮らしをできる限り長く続けていくことができるということが分かってきました。

昨今、西洋医学よりも副作用が少ないこと、原因がはっきりしない症状や慢性的な症状に効果があることから、鍼灸や漢方薬といった東洋医学を病気の治療に取り入れる人が増えています。そんな東洋医学が認知症の治療にも効果があると、いま注目を集めています。

1999年に開設し、最先端設備を整えた北京中医薬大学附属東方医院。病院では様々な医療分野で古くから伝わる東洋医学と最新の西洋医学を組み合わせた治療を行っています。また認知症の治療に関しては中国でトップクラスの医療体制が整っています。認知症外来の責任者、張允嶺先生は20年以上認知症患者を診てきた専門医。特にアルツハイマー病患者を多く診ている。張先生はアルツハイマーの進行を遅らせる西洋薬「塩酸ドネペジル」(アリセプト)の他に、独自に開発した漢方薬も処方している。なぜその漢方薬がアルツハイマーの患者に効くのか？日本で認知症患者に処方されている漢方薬「抑肝散」の効果などと比較し、漢方薬の可能性を討論します。

中国伝統医薬国際センターがある天津中医薬大学。大学には中国の伝統医学を学ぶために世界20余りの国から留学生が学んでいます。特に力を入れているのが鍼治療。そんな中国伝統の鍼治療を認知症治療に応用しているのが韓景献先生。認知症の症状緩和に効くツボの組み合わせを発見したことで有名。なぜそれらのツボに鍼治療を施すと、認知症の症状緩和に効くのか、その謎に迫ります。

また、ラットを用いた最新の鍼治療の研究では、鍼刺激により脳の海馬の一部で新生細胞の促進が促されることが分かりました。この海馬での新生細胞の促進は抗うつ薬と同じ効果があることから西洋医の専門家も注目しています。認知症に対する鍼治療の新たな可能性について討論します。

日本、中国ともに、増え続ける認知症患者を地域で支えることが課題となっています。北京市では張先生が中心となって、9年前から市内15か所の公民館で認知症に対する知識を学ぶ健康教育講座を開催しています。講座では「認知症判別システム」などを導入し、認知症の早期発見に努めています。川崎市では2007年12月に「街ぐるみ認知症相談センター」が開設。「認知能力」測るテストや臨床心理士による検査を無料で実施しています。北京、川崎両市ともこういったコミュニティに密着した場をもっと増やす必要性を感じています。地域で認知症患者を支えるために何が必要か？日本、中国の各講師が討論します。